

〔追悼〕

齋藤武雄顧問 追悼

名誉会長 鈴木 三郎

当協会顧問齋藤武雄博士には、平成7年1月28日かねて長期療養中であられた青森県平賀町の入院先で不帰の客となられた。九十二歳の長寿を全うせられたとはいえ、長年に亙り親交を忝うした迂生としては痛惜の念に堪えない次第である。また密葬のため初めてお知らせのあった後日の告別式には当然参列すべき間柄でありながら、既に寒冷期東北の旅に堪えられぬ老弱の身ではそれも叶わず、今以て申し訳ない気持ちで一杯である。そこで迂生としては、弔辞にも相当する内容の学界における御業績、日本ヤスパース協会への御貢献を称えた長文の弔電（告別式で披露していただいた）と御香華料をお送りしたのが、せめてものことであった。（なお本協会会員への御知らせがかくも遅延したのは、訃報に接したのが前号の発行直後で、本誌が隔年発行の故であることを御了承願いたい。）

想えば大兄と迂生との出会いは、終戦直後創立せられた日本哲学会の発足間もない昭和25年頃の大会（年次も会場も老生の記憶では不詳）においてであった。迂生が『実存という仮説について』と題する研究発表と質疑応答を終えて喫煙のため廊下に出た所で、後を追うように出て来られた大兄に声をかけられたのであった。お話によれば、弘前大学人文学部教授の大兄は既にヤスパースの『哲学』全三巻を御所持であるが、どうも理解し難い所が多くて困っている。これから本格的な研究に取り組みたいので、宜しく御指導願いたい、とのことであった。同学の誼みとはいえ、年少の迂生に対してこのような語りかけをなさるとは、何という率直かつ謙虚な御人柄であろうかと、私はこの時の感銘を忘れ難いのである。

爾来、約四十五年の長きに亙って我々は研究協力者の道を歩むことになったのであるが、大兄は、昭和28年創立された「ヤスパース協会」の熱心な地方会員として各種行事（研究発表、学際・国際交流の講演会）やヤスパース原著の

共訳事業にも出来る限り参加され、交友の輪は次第に広がっていったのである。また大兄は、文通による以外にも、母校文理大の哲学会や他の所属学界に出席のため毎年上京の度毎に迂生と連絡をとって会談の機会をもたれ、時には資料入手のため更に足を延ばして何度か鎌倉の拙宅を訪問されたこともあった。その頃、談偶々拙著『実存』（戦前から終戦直後までの論文集）に及んだ時、「優に学位論文に価する」とまで激賞され、いたく恐縮したことも懐かしい思い出である。

大兄の稀に見る旺盛な研究意欲から産出せられた論著は驚嘆すべき数に上り、『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』（昭和36年、創文社）（学位論文）、『ヤスパース研究』（昭和37年、理想社）はその代表的なものであり、論文集『ヤスパースの政治哲学』『ヤスパースの教育哲学』は、今日脚光を浴びているヤスパース哲学の実践的応用面への先駆的業績であった。

なお、博士のヤスパース研究・普及への思い入れの深さを示すものとして忘れてならぬのは、「日本ヤスパース協会東北支部」の熱心な運営である。これは、ヤスパース生誕百年祭（バーゼル大とハイデルベルク大が共催会場）に「ヤスパース協会」理事長として参加して絶大な感動を覚えた迂生が帰国後、当時各般の事情によって沈滞していた協会の活動を再び活性化する為に再発足させた「日本ヤスパース協会」の会則にある支部規定に準拠して、博士が率先設立されたもの（弘大哲学科の教員・卒業生・在学生・市民の有志が会員）であった。そして博士は支部年次学界において自らも毎回必ず講演（研究発表）の労を惜しまず、後進の指導に当られたのである。長年に亙るこのような御努力が弘大人文学部長、弘前学院大学長（弘大定年後）の激職の傍らも続けられたことは驚くべきことである。しかし御老齢のため長期入院が決定的となった時点で、この上の支部運営は不可能と判断され、幹事とも御協議の上、東北支部の閉止を遺言されていたと推察される。——博士の御他界に伴う一切の行事終了後間もない頃、その旨の届出が協会本部宛寄せられたのであった。博士としては洵に心残りのことであられたと思うのであるが、迂生は、いつの日か愛弟子の方々の中から支部再興を図る士の現れることを切に祈ってやまない次第である。

合掌